

令和 8 年 1 月 7 日

令和 7 年度 世田谷区立桜町小学校 学校自己評価報告書

桜咲く深緑の学び舎  
世田谷区立桜町小学校  
校長 中村 泰之

## 1 今年度の重点目標と改善方策(令和6年度末に設定した内容)について

### ① 「キャリア・未来デザイン教育」の実現に向けて

探究的な学びを通して児童が学習を自分事として捉え、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」が高まるような指導を行う。「課題を見だし、把握している」「課題解決の方法を考えている」「協働して学んでいる」「学びを振り返り次につなげている」という「探究のプロセス」を繰り返し、発展させていくことで、「せたがや探究的な学び」を推進する。

#### 〈改善方策〉

総合的な学習の時間において、「総合的な学習の時間と各教科で学んだことつながりを感じている」という項目についての肯定的回答は児童全体で 88.7%となった。カリキュラム・マネジメントを校内研究で推進したことが数値として表れている。学びのつながりを子ども自身が実感できていることは喜ばしいことである。今後も地域での体験活動、探究活動を充実させ、校内研究を通して生活科・総合的な学習の時間の活動内容を子どもにとってやりがいと学びがいのあるものにしていく。このことがキャリア・未来デザイン教育の実現に直結すると考える。

#### 〈成果と課題〉

キャリア教育に関する項目「将来『こんな人になりたい』『こんな人でありたい』という希望や願いをもっている」について、肯定的回答が 85.5%であった。また、学習に関する項目「授業で学んだことは、将来社会に出たときに役に立つと思う」の項目は 91.2%となった。3 年間、校内研究において、生活科・総合的な学習の時間を軸にカリキュラム・マネジメントで学びをつないできたことの成果と捉えている。探究的な活動を通して身に付いた力が「自分の生き方や将来」に結びつくのだというフィードバックをキャリア・パスポート等の活用を通して、さらに意識的に行っていく。

### ② 教育DXの推進

一人一台のタブレット端末を学習の基盤ツールとして活用することで、多様な学びの機会を保障する。その際には使い方を自律的にコントロールできるようにする。ICT の活用により、習熟度や学習の進度、興味・関心等、児童の個々の学習状況に応じた「個別最適な学び」、異なる考えや価値を組み合わせ、探究的な学習や体験的な活動を通じた「協働的な学び」の充実を図る。

#### 〈改善方策〉

これから個別最適な学びを実現していくためにも、タブレット端末の活用は必須である。しかし、使用時間や使い方において自己管理能力が求められ、それを子ども自身が行っているのが現状であり、これには限界がある。真に役立つ文房具としてタブレット端末を活用するためには、使用時間の制限や学校での保管管理等が必要だと感じている。区としての方策が出ないうちは、教師の意識を高め、子ども

自らが理想的な使い方ができるよう常に機会を捉え指導していく。

### 〈成果と課題〉

「授業などで、タブレットを使うことで学びが深まったと感じることが多い」については、93.1%が肯定的に回答している。日常の学習において ICT 機器の活用は定着し、様々な場面で探究的に使用されていると考えられる。しかし、保護者項目の「本校では、授業などで、学びを深めるために有効にタブレット端末を活用している」は 73.5%である。タブレット端末の活用に関する負の側面、学習に関係のないことを検索したり、学習と関係のない使用時間が大幅に増えていたりすることについては考慮していく必要がある。使用時間の制限や学校での保管等について、区全体で考えていくべき課題だと捉えている。

### ③ 多様性を尊重しながら共に学び、共に育つ教育の推進に向けて

人権教育を基盤として、互いを尊重し合う心情、自尊心や自信を育成し、自己肯定感を高める。多様性を理解し他者や自然を尊重し、あらゆる差別や偏見をもたず、相手の立場に立って行動できる心情を培う。

### 〈改善方策〉

わかくさ学級との交流の充実、様々な教育活動場面での意識的な指導をさらに充実させる。特性のある子どもの理解、一人ひとりにちがいがあることを受け入れ共に学ぼうという意識を様々な教育場面で育てていく。我々教師をはじめとした周囲の大人の思考や言動が大きな影響を与えると考えられるので、子どもの模範となるよう留意していく。

### 〈成果と課題〉

児童項目「学校での様々な交流を通して、自分が成長していると感じる」の肯定的回答は、92.8%である。にじいろ班活動が定着し、様々な交流が日常になっているからこその数値である。保護者項目「本校では、様々な交流（縦割り班活動や、通常の学級とわかくさ学級の交流など）を通して子どもが成長していると感じる」も 86.1%と高い数値である。今後も人権意識を高めていくため、様々な場面を捉え、指導を充実させていく。

### ④ 地域社会と協働した教育の推進に向けて

キャリア教育につながる生活科・総合的な学習の時間の単元開発をより充実させ、商店街や地域の美術館、専門学校や農業高校と連携した学びを構築していく。子どもたち自身が地域に出向き、そこでの探究的な活動を展開できるような学びを創造していく。地域の役に立つ喜びを子ども一人ひとりが実感できるようにする。

### 〈改善方策〉

研究を開始して 3 年が経ちかなり活動が充実した。生活科や総合的な学習の時間を中心に、地域に根差した教育活動をさらに具現化していく。地域との連携を深め、学びの場を学校の外へ創っていくことで子どもたちが必然を感じながら生き生きと探究的に学ぶことにつながる。

### 〈成果と課題〉

アンケート結果を見ると「本校は、地域の人や施設を教育活動に生かしている」についての肯定的回答が保護者全体 74.7%、地域 90.9%である。昨年度と比較して 10%上がっている。地域の「ひと・もの・こと」を材にして教育活動を展開することが保護者・地域に浸透しつつある。今後もこの方針を継続したい。

⑤ 「学校における働き方改革」の推進に向けて

創造的余白を生むために、職務の内容を吟味し、長年変わっていない様々な教育活動や職務内容について精査していく。

〈改善方策〉

児童項目「学校では、自分のやりたいことに取り組むことができる」への肯定的回答が92%となった。「子どもが学校で学ぶことを楽しいと思う→子どもの不平不満が減る→保護者の不安が減る。」という流れをさらに確固たるものにしていく。

〈成果と課題〉

本校教員の時間外在校等時間は明らかに減っている。会議の精選や地域行事への参加削減等、仕事量の削減だけでなく、前述したように子どもにとって学校が学び甲斐のある場所、楽しい場所になることが最善の働き方改革である。日常の指導助言、子どもの変化を見逃さないこと等を徹底しさらによい学校にしていくことが働き方改革の推進となる。

## 2 学校の変容と今後

前述した児童項目以外にも、「学校生活は楽しい」93%、「学校が好き」87.2%、「わたしはがんばってよかったと思えることがある」94%等、高い数値のものが多い。探究的な学びを充実させることで、子ども一人ひとりが学ぶ喜び・学び甲斐を感じ、学校が変わってきたことが数値として表れている。今後も本校の経営方針を維持しさらにこのベクトルを充実させていきたい。

しかし、公立学校は常に職員が入れ替わる。それは新しい風が入ってくるという良さもあるが、今ある良さを継続発展させることにおいては、マイナスの面もある。教員採用試験における倍率の低迷もかなりの負のファクターとなる。

人の入れ替わりは致し方のないことであるが、教職員が学校の在り方のビジョンを共有し、さらにこの学校をよくしていくという覚悟をもって職務にあたることが求められる。